

## 講演2 高機能広汎性発達障害の気づきと診断

桃山学院大学、かく・にしかわ診療所 郭 麗月

広汎性発達障害、その内でも知的障害を伴わない高機能広汎性発達障害の子ども達が注目されるようになってきた。このような関心の高まりは次のような流れの中で生じてきたといえる。一つは高機能広汎性発達障害者の手記が1980年代から次々と出版され、新ためてその世界の特異性が知られるようになったことである。又、同じ頃、英国の精神科医のL.ウイングは自閉症の疫学調査を行う中で、自閉症の診断基準を部分的に満たす子ども達が多数存在すること、その中でも言語障害が非常に軽い子ども達は、かつてアスペルガーが記述した症例に一致する特徴を示すことを見だし、「アスペルガー症候群」という名称を提示した。さらに神戸小学生殺傷事件以降の、今までの概念では理解できにくい少年犯罪の報道の中で、精神鑑定結果として、広汎性発達障害、アスペルガー症候群がとりあげられたことも影響を及ぼしている。

このように、高機能広汎性発達障害の存在に関心が高まる中で、以下のような問題が浮かび上がってきている。

まず、この範疇の人が予想以上に多いことである。約1%といわれる広汎性発達障害者の半数が高機能であるとの調査もある。最近ではテレビの特集番組やインターネットの情報から、自ら疑って受診、相談する成人も増えている。その反面、きちんとした知識は専門家にも充分定着しておらず、看過されたり、他の疾患や問題と誤解されていることもしばしばである。

第二に、「社会性の障害」が中心問題であるこの人達にとって、学校、職場などの集団に入ることには多くの困難を伴っていることである。学習面、能力面では偏りはあっても高いため、その特異な世界の捉え方から生じる行動のズレは「わがまま」や「躰けの悪さ」として非難の対象となり、本人の深い挫折感や被害感、周囲への怒りを招くことになる。学校や職場の中で孤立したり、いじめ被害を受け、不登校や不就労になる人は、臨床ケースからみても多い

第三に、そのような不適応状態と、感覚過敏性、独特の論理展開などが、周囲から理解されず適切な対応のないまま過ぎていった結果、二次障害と呼ばれる、精神状態や行動上の問題に至ることである。先に述べた犯罪はこのような問題が様々な条件の中で不幸な結末に至ったものと考えられる。

このような問題に対処するためには、早い時期から高機能広汎性発達障害の特徴を見極め、周囲の理解と適切な対応を引き出し、長期に亘る支援体制を組むことが必要である。

講演では、高機能広汎性発達障害の診断基準と家庭や幼稚園、学校などで気付くためのポイントについて述べる。